明治二十年十月廿五日刊行

毎月一回發行
壹冊正價廿錢
全國無郵送稅

通信女學講義錄

第六卷

女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○通信女學發行の主旨

女學雜誌社　巖本善治

當今女子教育の說、甚だ隆んとありて、各地の女學校は、日に日に其數を加へ、此に就て學文する女子も、亦た月々に多くあれり、此摸樣にては、今四五年の内には、女學の進步非常にて、おさおさ男子にも劣らざる有爲の女流を、多く出さんは勿論、婦人一汎の有樣必ず一變して、今の如き交際にては、事足らざるに至るべし、故に、今日に於て、尙ほ學文せざる貴孃方は、一日も早く學校に入りて、一と通りの修學を爲し、決して時勢に後れざる樣に勉めらるべし、之れ甚だ大切の事あり、然るに、既に一家の妻とありて、家事向万端を取扱はるゝ方々は、固より學校へ通はるべき餘暇もあく、又ゆるゆると讀書さるべき便利も小かるべけれバ、此樣の人々が、別に學文さるゝ方法なかるべからず、抑も、一家を脩るには、家內衞生家內經濟の事を初として、母親たるの覺悟、育兒の心得あどは、是非とも學び置かでは相成らず、特に又追々開化して、交際の有樣も變化する今日に當りては、文學理學の一斑より、歷史地理の大略、及び、西洋女禮式の一と通りを承知せざれば、大ある辱を受るともあらん、故に、此度かゝる妻君母親たちの都合を計りて、通信女學と申す仕組を設け、家內に居ながら、少々宛の餘暇を窺みて、學文さるゝやうの方法を備へ、二三年にて恥かしからぬ程の學力を得さするやう、教授すべし。

略則

通信女學は、月々中本六十頁以上の講義錄一冊を出版す。右講義錄には、女子生理、育兒心得、家內經濟、女藝案內、萬國史略、文學一斑、理學一斑、家內理學、西洋女禮等の諸科を講述し、且つ、其問答叢話の一欄を置て、右講述の上に付き、質疑を寄せたる人々に應答し、又婦女學文の心得、其外、諸般の有益ある事件をも、書載すべし、尤も右諸科講述の終るを待ち、漸次に、尙更に高尙なる學課を教授す。右講義錄の讀者は、文意事理等に關して、質問を寄するを得、郵劵封入の上、右質問を送る時は、可成速に應答し、尙ほ人に示して益ある分は、問答欄內に收む。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○文學一斑　（第六回）

語格（其二）

前號に體言、用言、助詞などの大畧をのべたれど尚は初學の輩には胸に入がたき條やればからまし。但し體言には活用もなければ然まで惑はしきこともあるまじけれど用言にいたりては各樣の活用をそなへて其意もまた種々にうはりゆく故に容易は悟りがたく初學のまどふかどく〳〵ぞ多かるべき。されば更に詳らかに說示さんがために左に用言の活用圖をあらはし次々に圖につきて解さとすべし。

用言活用圖

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

用言の十四種活用圖

第一　四段（よだん）

十四種活用	飽（あ）	押（お）	打（う）	思（おも）	住（す）	釣（つ）	
第一階將然言（しやうぜんげん）	か	さ	た	は	ま	ら	ば　ず　で　じ　む　まし　なん
第二階連用言（れんようげん）	き	し	ち	ひ	み	り	て　たり　つ　けん　けり　なん　ぬ　き　し
第三階終止言（しゆうしげん）	く	す	つ	ふ	む	る	らん　らし　べし　めり　なり　まじ　な　ばかり　かし　と　とも
第四階連躰言（れんたいげん）	く	す	つ	ふ	む	る	に　を　より　まで　かな　なり　ばかり
第五階既然言（きぜんげん）	け	せ	て	へ	め	れ	ば　ど　ども

第二　一段（いちだん）

十四種活用	着	似	干	見	射	居	
第一階將然言	き	に	ひ	み	い	ゐ	ば　ず　で　じ　む　まし　なん
第二階連用言	き	に	ひ	み	い	ゐ	て　たり　つ　けん　けり　なん　ぬ　き　し
第三階終止言	きる	にる	ひる	みる	いる	ゐる	らん　らし　べし　めり　なり　まじ　な　ばかり　かし　と　とも
第四階連躰言	きる	にる	ひる	みる	いる	ゐる	に　を　より　まで　かな　なり　ばかり
第五階既然言	きれ	にれ	ひれ	みれ	いれ	ゐれ	ば　ど　ども

第三　中二段（なかにだん）

十四種活用	起（お）	落（お）	戀（こ）	恨（うら）	老（お）	舊（ふ）	
第一階將然言	き	ち	ひ	み	い	り	ば　ず　で　じ　む　まし　なん
第二階連用言	き	ち	ひ	み	い	り	て　たり　つ　けん　けり　なん　ぬ　き　し
第三階終止言	く	つ	ふ	む	ゆ	る	らん　らし　べし　めり　なり　まじ　な　ばかり　かし　と　とも
第四階連躰言	くる	つる	ふる	むる	ゆる	るる	に　を　より　まで　かな　なり　ばかり
第五階既然言	くれ	つれ	ふれ	むれ	ゆれ	るれ	ば　ど　ども

一　四段（よだん）の活用第五階（だいごかい）既然言は上に「こそ」の係（かゝ）り辭（ことば）あれば其の結（むす）びとなり「こそ」の係（かゝ）り辭なければ或は使令言（しれいげん）となり或は希求言（ききうげん）となるなり

一段、中二段、下二段、加行變格、佐行變格は第一階の將然言によを添へて使令言となり

奈行四段一格は第五階のねにて使令言となるなり頁行四段一格へ四段と同じく第五階のれにて上にこそなくば使令言となるなり

第二階の連用言は言（いひ）据（すう）れば體言ともなるなり

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

第四　下二段（しもにだん）

得（う）　受（う）　痩（や）　捨（す）　兼（か）　辨（わきま）　嵌（は）　消（き）　枯（か）　飢（う）

語尾	接續
え　け　せ　て　ね　へ　め　え　れ　ゑ	ば　ず　で　じ　む　まし　なん
え　け　せ　て　ね　へ　め　え　れ　ゑ	て　たり　つ　けん　けり　なん　ぬ　き　し
う　く　す　つ　ぬ　ふ　む　ゆ　る　う	らん　らし　べし　めり　なり　まじ　な　ばかり　かし　と　とも
うる　くる　する　つる　ぬる　ふる　むる　ゆる　るる　うる	に　を　より　まで　かな　なり　ばかり
うれ　くれ　すれ　つれ　ぬれ　ふれ　むれ　ゆれ　るれ　うれ	ば　ど　ども

第五　加行變格（かぎやうへんかく）

來

語尾	接續
こ	ば　ず　で　じ　む　まし　なん　し
き	て　たり　つ　けん　けり　なん　ぬ　し
く	らん　らし　べし　めり　なり　まじ　な　ばかり　かし　と　とも
くる	に　を　より　まで　かな　なり　ばかり
くれ	ば　ど　ども

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第六	第七	第八
佐行變格	奈行變格	良行四段一格
爲	往　死	有　居
せ　ば　ず　で　じ　む　まし　なん　し	**な**　ず　で　ば　じ　む　まし　なん	**ら**　ず　で　ば　じ　む　まし　なん
し　て　たり　つ　けん　けり　なん　ぬ　き	**に**　て　たり　つ　けり　けん　き　し	**り**　て　つ　けん　けり　なん　ぬ　き　し
す　らん　らし　べし　めり　なり　まし　な　ばかり　かし　と　とも	**ぬ**　らん　らじ　べし　めり　なり　まじ　な　ばかり　かし　と　とも	**り**　かし　と　とも
する　に　を　より　まで　かな　なり　ばかり	**ぬる**　に　を　より　まで　かな　なり　ばかり	**る**　らん　らし　べし　めり　まじ　な　に　を　より　まで　かな　なり　ばかり
すれ　ば　ど　ども	**ぬれ**　ば　ど　ども	**れ**　ば　ど　ども

四

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

以上は作用言

以下は形状言

第九	第十		第十一	第十二
四段の五音より轉る格	くしき、しく、しき第二の音より轉る格		くしき格	しくしき格
飽有　押有　打有　逢有　往有　釣有	淺有　深有	戀有　悲有	淺　深	戀　悲
ら	から	ーから	み	ーみ
ば　ず　で　じ　む　まー　なん	ば　ず　で　じ	む　まー　なん	く／ば　て　して　と　とて	ーく／ば　て　して　と　とて
り	かり	ーかり	ー	ー
つ　て　けん　けり　なん　ぬ　き　ー	つ　けん　けり　なん	ぬ　き　ー	と　とて　かー	と　とて　かー
り	かり	ーかり	さ	ーさ
かー　と　とも	かー　と	とも	かな　よ　なり　を　ばかり	かな　に　ばかり　なり　を
る	かる	ーかる	き	ーき
らん　らー　めー　よ　を　より　まで　かな　なり　ばかり	らん　らー　べー　めり　まじ　よ　を　より	まで　かな　なり　ばかり	かな　と　に　なり　ばかり　を	かな　に　なり　と　を　ばかり
れ	かれ	ーかれ	けれ	ーけれ
ば　ど　ども	ば　ど	ども	ば　ど　ども	ば　ど　ども

以上十種の活用を作用言といふ

以下四種の活用を形状言といふ

状形言は作用言とこゝかーこ同じからず○くの段は将然言にーて亦た連用言となり○ーの段は終止言にーて○さの段は連用言ともなるなり第五階の

五

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

階	名	第十三 くしき一格 善	第十四 しくしき一格 惡
一階	連用言いひすうれば躰言ともなるなり	け む む	け｜ む ば
二階	將然言 連用言	けく ｜てな ｜て と とて	けく｜ ｜てば ｜て と とて
三階	終止言	｜ と とて か｜	｜ と とて か｜
四階	連體辭言	さ かな に なり ばかり を	けさ｜ かな に なり ばかり を
五階	連體言	けく けき かな ばかり なり （にを） と を に	けく｜ けき｜ かな ばかり なり （にを） と を に
六階	既然言	き け ば ど ども	き｜ け｜ ば ど ども

けく｜けくへ○を○にの他には活用ことなく又作用言へ皆五階なれども形狀言へ六階に分たる是みな作用言と形狀言との異なる所以なり

六

活用圖の上にはめたる漢字のことをいふ

右の圖の上のかたに飽、押、打、思、等の字をならべたるは活用の言を凡例にしめせるなり。四段の條に飽の字を記しその下にかきくくけとあるは即ち飽かん。（第一階は將然言にしてテニヲハの辭をそへざ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

れバ語をなさず然る故に將然言を受るテニヲ（ハの中の一つなるんをそへて云り皆おなじ）飽き、飽く、飽け、とやうに活用（四段と一段とハ第三階第四階ともに同音なれど第三階ハ終止、第四階ハ連體にしておのづから受るテニヲハも別なり。又中二段以下にいたりてハテニヲハのみならず其言も同じからざれバ限を別にたてゝく、すす、きる、きる、にる、にる等の同一の字を二重に出せり然ど重ねいふべき要なきときは一ッを畧きいふこと多し）一段の係に着の字を記しその下にききるきるきれとあるハ即ち着ん。き、きる、きれ、とやうにはたらき。中二段に起の字を記しその下にききくくるくれとあるハ即ち起きん。おき、おく、おくる、おくれ、とやうに活用なり。以下みな此例におなじ（漢字に假字のつきたるハその假字より下へ讀くだすべし縱へば飽の字にあの假字ありわかわきわくわけとよみ押の字におの假字ありおさおしおすおせと讀み。一段なる着、似、干、等の字。下二段の得の字のごとき假字を附ざるハ漢字ハ言の意を示すまでに記しゝにて讀むにハ假字のみを用ゐるなりきききるきるきれ、にににるにるにれ、ええうるうるうれと讀むべきなり）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

階ごとの用言の下にあるテニヲハのことをいふ

四段一階のテニヲハの事

同二階のテニヲハの事

階ごとに一階ば、ず、で、じ、む、まし、なん、二階て、つ、けり、けん、なん、たり、ぬ、し、き三階らん、らし、べし、めり、なり、まじ、な、ばかり、かし、と、とも、四階に、を、より、まで、かな、なり、ばかり、五階ば、ど、ども、等の詞を載たるは所謂テニヲハにして其階其階の用言を承てその言の意義を充分にあらはす所のものなり例へば四段の第一階なる飽か。にテニヲハのずをそへて飽かずといへバ俗にいふアカナイの意にしてましを之にそへ飽か。ましといへバ俗にいふアキマシヤウの意となるなり。又おなじ第二階のテニヲハのけりを住み。にそへて住み。けりといへば俗にいふスミキタアタの意になりなんをそへて住み。なんといへば俗にいふスミマシヤウの意に

八

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

用言十四種の活用を順次に述ぶ

なるが如く承る詞によりて其意もかはり其目的をも知しむることゝなるなり（テニヲハの事ハ別に個條を設けて詳細に説明すべし）偖これより更に用言十四種の活用の第一より始め次々に説明すべければ前なる活用圖と照し合せて心得べし語學ハたゞ一わたり看過してハ容易ならざるものゝごとく思ふめれど然るものにハあらず心を潜めて反復熟讀せバ頓に曉り得らるゝなり一次さとり得バ永く己みづからの寶となりて文かくにも書よむにも又つねの言語にも益をあたふることと擧てかぞふべからず語學は文法の源にして文章をつゞり歌よむなどの業にのみ必要と考ふるハ達らぬ考へとこそいハめ通俗の言ひかはす

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

四段の活用

第一階將然言のこと

將然言ハ助辭を添へて初めて語をなす

語にても國語の道にくらからバ正しく美はしく言いでんことハ望むべくもあらじかし

第一 四段の活用　四段といふハ五十音の中にて「かさたはまら」の第一音「きしちひみり」の第二音「くすつふむる」の第三音「けせてへめれ」の第四音と四段に活用がゆゑの稱へなり其第一階を將然言といふ將然言とハ將に然らんとする義にて語の意いまだ定らず言の起るが故に如此ハ名けしなり其故は飽か押さ打た思はのみにてハ語をなさず之にばずでじんましなん等の承辭をそへて始めて言意あらはるれバなり飽かにじをそふれバ飽マスマイといふ意がしられ押さにましなどそふれバ押マシヤウといふ意があら

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

はれ打た。になん‖をそふれバ打ウナラヨイといふ意がいで思は。になむ‖をそふれバ思ウといふ意がいでくるなり。又ば。で。の承辭ハ將然の言を承て下の言につゞくるなり例へバ「花咲かば。‖うれしからまし」といへバ花が咲かウナラ（ば）嬉シク有マシヤウといふことになり「逢はで。‖かへりぬ」といへバ逢ハナイデ（で）歸リマシタといふことになるなり

附言

一階の上に飽押打等の漢字を置たるハ凡そに例を示さんにてこの漢字のほかにはこゝに活らく言なしといふにあらず言語の數ハかぎりなし何で然ることのあるべき。斯てその限りなき千万の言語ハ皆この十四種の活用の外にいづることなし。されバ十四種の活用だに心得たらんにハ千言万語ハ自在に用ゐることを得るなり。言語の種類にしたがひて十四種の中に當こゝろみ其正しき規矩によりて言語を用ゐべし

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

●正誤

第五號一頁四行自ノ傍訓おのずれおのづの誤　●同二頁五行己ノ傍訓をのれおのノ誤　●同三頁六行延ハゑノ誤　●同四頁三行ゐハゑノ誤　●同四頁三行ヱハヰノ誤　●同四頁十一行類ノ傍訓たぐいハたぐひノ誤　●同四頁十一行同韻ノ傍訓どういんハどうゐんノ誤　●同五頁五行かいまみノいノ右傍ニ○ヲ脱ス　●同七頁一行◐ハ○ノ誤　●同七頁十行ぴハひノ誤並ビニひノ右傍○ヲ附スルヲ脱ス　●同七頁十一行そえてハそへてノ誤　●同八頁八行細註ノ鐙ノ傍訓すゐノ二字ヲ脱ス　●同八頁九行細註オユ、ト、オユレ、トノ間ニオユルノ三字ヲ脱ス　●同九頁四行細註でとしすトアルすハ誤入ナリ除クベシ　●同九頁十行形狀ノ傍訓けいじややうトアルハけいじやうノ誤　●同十頁一行ゑくしゝき一格トアルハくじきゑくしゝき第二の音より轉る格ト云フコトノ誤　●同十頁一行よふノふハぶノ誤　●同十頁七行細註おく、ト、おくれ、トノ間ニおくるノ三字ヲ脱ス　●同十頁七行細註落ちん、ト、おつ、トノ間ニおちノ二字ヲ脱ス　●　●同十頁八行うトけトノ間ノ右傍ニ、ヲ脱ス　●同十頁九行細註得ん、ノ下う、ノ上ニえ、ノ字並ビニ黒點ヲ脱シ受けん、ノ下うく、ノ上うけ、ノ二字並ビニ黒點ヲ脱シ痩せん、ノ下やす、ノ上やせ、ノ二字並ビニ黒點ヲ脱ス　●同十一頁七行類ノ傍訓たぐいハたぐひノ誤

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

吾等休日に散歩せんとして雨にあへり

理學一斑巻之壹

地文學講義

博士ゲイキー原著
社員抄譯

第一回 序

今ま一つのお話を設け、假りの例として、少さか申さんに、或る夏の日の事なり、來る何日は幸ひ休日なれば、朋友等打連れて、そゞろありきせんと約束せり、之は花を取集めんと思ふもの、小石を拾ろひ集めんと思ふもの、若くは只だ休日のうれしさに、只何となく出歩るきたしと望むものなど、何れ銘々にそれ／＼の考へありての事なり、扨ても、其約束の日となりぬ、朝早く起き出でゝ見るに、天氣靈らかにして、一朶の雲も無ければ、喜ぶと限りなし、いざ朝

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

飯食べて後ちにこそ出發せんと、兼ての話しどほりに、其心構して、或るひは籠を出すもあれば、棒をさがすもあり、すべて、此日の遊びに入用なる色々の道具を用意して、在りたる折柄、空やうやくに曇りを生じ、僅かと見へたる雲のあし、急はかに走り廻りて、一天乍ち墨を流し、未だ朝飯の畢らざるうち、先づ大きやかなる一滴の雨ポツリと降りたり、然れど、之は、少さかの間の驟雨ならん、暫時にして止まざるとやあらんと、尚ほ氣を落さで、遊びの用意を爲したるところ、雨の雫追々に大きくなりて、彌々降りしきり、窓にあたる音は、霏々として聲あり、陶器の如く乾いたる路の上に、乍ち遠近に小さき池を出現する有様となり

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

小止を待て外出し河水を見たり

たれば、今までも、尙は天を望んで、賴み切つたる吾々の仲間は、茲に至つて全く氣を落し、失望かぎりなき次第にてありしことなり。

今日は、仲好き朋友と步るき暮して、快ちよき遊びせんと思ひ乍ら、今までにも出發せんと用意したる出先に至りて、突然か丶る不幸に遭ひ、吾等の失望、啻に申すに辭バなきのみならず、眞に終日雨をうらんで、不平ながらに暮らすべき習らひなるが、扨て此に於て、一つの考ふべきとあり、則はち、吾等は、假令ひ、此の雨天の爲に止められて、外出は爲し得ざりしとも、切めては、此の雨天を利用して、何か今日の遊びの償ひをば爲し得ざるべきかと云ふとなり、然

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

るに、人は、必らず失望すべきものにあらず、吾等は、十分に此の償ひをば取り得たることなり、其を如何にと云ふに、此日、晩方に至りて、天少しく曇りを散じ、雨暫らく小止みしたり、吾等は、閉ぢ籠められたる小鳥が、籠の開いたるを喜べる樣して、急ぎとも〳〵に家を飛び出でたりと思し召されよ、只見る、道の少しく傾むきたる邊りには、尙は泥の水、瀧の如く落ち流れ、路上一面に雨にうるはひて、足を入るべき處もあらず、然れど、余は、先づ人々を案內して、其近くなる、ある河の堤の傍らに參り、尙は樹梢の名殘として落とし來たる雨の雫を拂らひ乍がら、橋を渡たり、凡そ橋の眞中と思はるゝ所に至りて、足を止め、眞下に矢を射

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

る如くに流るゝ川の水を眺めたり、あゝ其有様の變りたると、眞に驚くべし、昨日までは、水量はなハだ少くして、遠近にあらハるゝ石の數を算み得たる程なりしに、今日の水勢は、さかまき流れて、眩らめく如く、水量も亦た非常に増して、平常の河とは思ハれざるほどなり、因つて、吾々は、暫らく、此の橋の上に留りて、其流れを眺め居たるに、水の逆バしり行くと共に、數多の木の葉樹の枝等、夥たゞしく流れ行くなり、其のみか、時としてハ、甚だ大なる枝もあり、又時としては、全幹そのまゝにて流るゝともあり、其外、藁、乾草、板、かきねの破れ、又、甚ハだしきは、水勢に逆らひ兼ねたる家鴨までが、奔流と共に、吾等の足の下を突過し去り

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

外出せざりしことの償をなさんとせり

第一の問

て行くなり、吾等は、互ひに申し合へり、斯ては、水大に溢れて、堤の上に越へ、田畠をも荒らし、家屋をも多少は害したるならん、此のカキネ、板、草の類を見れば、今日の水害は、決して少からざりしとならんと、申し合ひたると也。

吾等は、斯くして暫時橋の上にたゝずみたるが、熟ら思ひ見れバ、今日、たとひ、雨天の爲めに思ひたるやうの出遊びは出來ざりしとも、今まかゝる面白き景色を見、かゝる愉快の趣を味ハひたれば、之等につきて、一ッ二ッの問題を出して、自からの研窮となし、せめては、今日の出歩るきを爲し得ざりしとの償ひを爲さんとは思ひたり。

依りて、先づ、吾等自から問ふべし、抑も、此の河には、何處よ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

第二の間

りして、斯る多くの水を得たりや、曰く、雨の降りたれはならん、よし然らん、但し降りたる雨は、何如にして、多く此の河の中に流れ入りしや、何故へ、外々へは流れ散らずして、殊更に、此の河中へは入りたる、此の類の事、即ハち、第一の質問なり。

次に吾等く亦た自から問ふべし、此の雨なるものは、抑も何處より來れる乎、早朝には、一天晴れて少かの雲もなかりしに、暫時にして乍ち雲を起し、雨を生ぜり、左れは、此の雨を出せしは雲ならんとこそ云ハるゝならん、但し、左様ならは、此の雲ハ、何處より來り、又た、何如にして雨となり、遂に、下に降るに至りしや、此類の事、即ハち、第二の質問也。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第三の問

次に、吾等又た自から問ふべし、河の水ハ、何故へ一方へ流れて、其他の方角へは流れざるや、又た、河の水甚だ少くして、遠近に露ハれたる石を踏んで、流れを横ぎりたる比ろも、只今、水量大に増して、激流滔々たる時も、流れの方角の同一にして、少しも異らざるは、抑も何の故か、此類の事、即ハち、第三の質問なり。

第四の問

次に、吾等又た自から問ふべし、昨日は、河の水清浄にして澄みたるが、今日は甚ハだ濁ごりて、色黒ろし、之れ、何故なるや、吾等此の水少々をコップに取りて家に持ち歸り、一夜靜かに放置して、翌朝之れを見るに、水全く元の如く清浄となり、コップの底に、精かき泥土層を爲して滞ふるを

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第五の問

認めたり、由つて之を振り動かすに、底に沈み居たる泥をだちて、水を濁らし、乍ちにして、復たび黑色の濁水と爲りたり、之に由りて、彼の河の水の大に濁りたるは、必竟之に泥の混じたるゆへと悟り得たるが、扨て、此の泥は、何處より來れるか、甚だ明かならざるものあり、此類の事、即ハち

第四の質問なり。

又た自から考ふるに、此の激流の水、及び、水に混じたる泥は、眞に莫大のものあるが、斯く絕へず同一の方角に向つて流れ行かんには、其末、そも何如なる處まで流れ行きて止まるべきか、尤も疑はしき所あり、即ち、亦た此類の事をも質問するなり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第六の問

以上の諸問を合せ考へたり

又た自から考ふるに、今ま吾々が觀る所の河は、吾が國に幾萬流とある河の中のたゞ一つにして、吾が國は、亦た、全世界中の万國の只だ片ぱとりに在るものなり、左れば、吾國中の流れ、及び、万國惣躰の河々は、何れも、大水出で丶、時時は、斯の如く溢れ流る丶とあるならん、然らば、斯く迄に多き河の水は、何處に參りて、後ち何如になるべき乎。

以上の如き、色々の質問をば、心に浮ませ、吾等互ひに之を質問し乍ら、家の方へと歸りたり、其時、今日一日の中に實見したる事々を取集めて、之を合せ考ふるに、吾等は、先づ、天明らかに霽れて青く、太陽其中にかゝやいで四方を温ためたる折を見たり、次に、雲天の一方に起り乍ち廣ろが

三

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

りて、濃密の黒雲となり、暫時にして、雨を降したることを見たり、次には、吾等河の流るゝを觀、亦た、河は大雨の故に由りて溢れたるを見、又た其の溢れたるときは、水色の泥を以て濁りたるを見たり、箇樣にして、吾等は、天と地との間に、密切の關係あることを承知するを得たり、即ハち、朝たには、吾等の頭上に雲の出で來らんとは思ひ設けざりしとなるに、日の未だ晩れざる前に、既に雨となり、大水となり、樹木かきね、農作物なんどの壓し流さるゝこととなり、橋梁の落つることとなり、田畠の荒らさるゝこととなり、村落都市水害を蒙つて、人命財産に莫大の損害を與ふることとなりたり、此等前后の變化の互ひに關係する所ろは、即ハち、吾

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

都に在るも田舎に居ると同樣の彷彿は出來べし

等が、今日一日の中に於て確かに目擊したるところ也。

斯く申さば、都の眞中などに住居さるゝ方は、或は、失望して云ハるべし。成る程、田舎片ほとりに住まへる人々は、大雨の后ちに、斯る變化の起る趣を目擊さるゝ便利もあるべし、然れど、都府熱沓の間に住居せる悲しさには、斯る大なる河もなければ、隨つて、大水の出たる例しもなく、只今右に云ひたる如き變化の面白みを承知するとを得ざるなりと、申さるゝならん、然し、之れ必らずしも左樣にはあらず、成程、都の眞中に右に云へるようの大河なからんとも、彼の小き溝の内に於てだも、又た、同樣の出來事あるものなれば、之によつて、亦た同樣の趣を推して考ふるとを

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

尋常普通の事中々分りがたし

得べきなり試みに御覽あれ、最初は清淨なる雨の水も、其の溝の内を流るゝときは、眞に濁つて不潔のものとなれり、之は街道の砂塵芥等の混ざりて、流るゝゆへなるが、此の溝の流れには、亦た街道に棄てゝありたる藁屑コルク木の片なんどをも推し流して、荷ひ去ると、假令ひ、其のもようは小なりとも理屈は、彼の大河に大水の出でたるときと異ることなし、然れば、都の眞中に住ひ、近邊に河のなからん折に、若し心を附けて之を考ふれば、見る所ろの者として面白き道理を示さゞるとなきなり。

故に、吾等もし少しく心を引〆て、平常身のまわりに起る所の色々の出來事に注意せば、何の味ひもなしと見へた

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

る。尋常一般の事物も、其實、相互ひに關係して、甚だ有益なる道理を示すの趣を承知し得ることあらん、左れば、日光雲風雨河霜雪など云へるものは、吾等が多年目にも見、耳にも聞き慣たるものにて、別段改めて之を奇しみ思の心毫しも起らざることなれども、若し、心を引〆て、此等尋常の事をも能く注意して考ふるときは、先きに尋常あたり前への事と思ひたるが、今ま其の道理を見出すについて、甚はだ困難を感ずるが如き次第となるべし、此故に、雨と云ひ雪と云ひても、吾等は、たゞ之を雨と見、雪と見て、別段之を奇しむの念なく、随つては、之を改めて研究せんとの考もあらざることなるが、今もし、曾て雨の降たることなき國に住

ひたる人が、初めて雨の降るを見たるか、元來暖地に人と爲りて、寒氣と云へることを知らざるものが、或る國の冬に出あひて、雪霜を見たらんには、其人、之を何如ほどにか驚くならん、斯くて、其人もし吾々に向ひ、何故雨は降り候や、何故、雪は積り候や、何如なれば、斯くも寒く候にやと問ひたらんとき、吾々は、果して能く之に返答し得べきや、何如に、吾々は、平生、餘まり見なれ、聞なれたるものは、何も變ハりたることの無きものとして、自から之を奇しみ問ふの念なく、之を問ふものあれば、反つて知れ切つたることを問ふの人かなと笑ふ程ならんが、今ま、斯る外國の人が來つて、之を熱心に質問したることありとせば、其時吾々は果して

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

尋常の事も之を學べば得あり

此講義の主意の事

何如にか答へん、此時返辭の出來ざるは、即はち、吾々が雨雪など尋常の事物と云へるものに付ても、尙ほ確かとしたる道理を、自から承知して在らざるが故なり。

されば、世の中の事物は、何如ほどに普通尋常と見へたりとも、若し精かに心を着けて、之を穿鑿するときは、何れにも、皆な、未だ明かならぬ道理の存するとを承知するものなり、故に、一般同樣と見へたるものにも、之を研究すれば、必らず、夫れ丈けの報いは之れあるものと知るべし。

之を以て、吾人は、此の地文學講義に於て、之より下に、かゝる尋常普通と思はるゝ事物を擧げ示して、其物等の間だに存する、面白き道理に注意せしむるとを務むべし、故に

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

此講義には、たゞ〳〵物の名又は片くるしき文字なんどを覺へさせんとは望まず、又た、種々の面倒なる規則確言を暗誦させんとするにもあらず專ぱらの主旨とする所は、諸君をして、自分の眼を開きて、細かに四方の出來事に注意せしめ、諸君一身の周圍には、如何なる驚くべき事柄が起りつゝあるやと云へる事をば、自から穿鑿せしめんとするに在るなり、諸君もし此の一事を、心に置て、特更ら其眼を大きくし、其耳を廣ろくして、散歩運動し、ひたすら四方の出來事に注意あらば、其面白ろさは、只だ何の志もなく、徒らにそゞろありきするに比ぶべくもあらざるべし。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

左れば此の世の中には印刷出版したるものゝみが所云る書物にはあらず、其外に、更らに一つの大なる書籍あり、而して、此の書籍は、眞に大部莫大のものにて、諸君が一生の勉强を以て、之を研究あるとも、中々其一部分をだも研窮し盡すとは、得て能ハざるべしと思ハる、抑も其の大書籍とは、何なりやと云ふに、即ハち、此の空氣、此の地球、此の洋海の如きもの、之れなり、此等は、何れも、自然に備ハつたる書物と同樣のものなれば、諸君之を見て、之を讀み、能く勉强して、之を研窮あらば、之れよりして、數多の面白ろき道理を發明あるべく、其樂みや、眞に愉快至極ならむ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○育兒心得（第六回）

問。乳離れは、大抵、何時比に致さすべきものに候や。

答。之は、固より一定して申しがたきものに候。左れど、今ま、我國の女方の如く、餘り勝手に久しく乳を飲ませては、宜しからぬと思ハれ候。先づ、普通の道理に由つて、大概を申せば、九月目にて離すと宜しかるべし。尤も、母親の軀、もし弱からば、半年にて離しても不可なきのみか、之れ反つて必要の事なり。若し又た、子供の質非常に弱わからば、一年の間だ飲ませても宜ろし。要するに、其母、又は、子供の樣子に由つて、長くもし短くもするとなり。但し、之は、乳離したるのち、牛乳を飲まするものと見ての說なり。然る

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

乳離れの後の食物の事

に、家もし貧しくして、牛の乳などを飲ませがたき時は、止を得ず、更らに、久しく母親の乳を飲ませずては相成るまじく候。

問。然らば、乳離れの後ちは、只だ牛乳のみを飲ますべきものに候や。

答。決して左様の儀には候はず、牛乳を混ぜたるものを用ゆべしとの意味に候、即はち、此の講義の第三第四兩回に跨りて申置きたる、種々の製法により、色々の食料を造りて、子供に食べさするよう爲さるべき事あり、尤も、乳離れをして、此の食物のみにて育つ迄での間は、成べく、其の變化を漸々にし、決して、急に變へざるように取扱はるべ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

種痘の事

し、即ち、最初に段々と乳を飲ますとを減らして、其代りに、少しづゝ彼の食物を食べさせ、日を追ふて、移り變り、遂に全く乳離れして彼の食物をのミ食べるように至らしむべきとに候。

問。扨て、次に、種痘の事を承り度候が、一躰、之は効能あるものに候や伺ひ度候。

答。此は、申すまでもなく、眞に必要の事にて、此の種痘の術發明せられたる爲に、幾干の子供が、生命を助かりたるか、測り知られぬものに候、然るに、世には、往々之を左程になきものと見下て、申さるゝに、假令ひ、種痘したりとも、尚は、本痘に罹とあれば、實際決して頼みに爲るものにあ

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

らずと箇様に云ハるゝ方もあれども、之は大なる誤りに候、成程一度び種痘したるものが、後ち本痘を患うるとも候へど、其人すでに種痘を爲したる故に由りて、病の氣ハなはだ薄く、大抵は、餘程輕るき症にて止まり、決して、危篤の心配などはあるまじきなり、特に、子供に致せ、大人に致せ、もし七年目に再び種痘するように取計らひ申さば、尚更らに、其効能著るしく、後には、遂に決して痘病に感ぜざるに至るべきものに候、されば、種痘の功能あるとは、無論にて、中々疑うべき所のなきものに候へば、子供などハ、殊に早く此を受けさせて、大切の玉の躰を傷けざるように致さるべきものなり。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

出生后何月目に種痘すべきやの事

問。然らば、成るべく早く子供に種痘を致させたく候が、生れ出してより、大抵何月目程に致して、宜しく候や、伺ひたく候。

答。先づ、二月目に致すを、適宜の事と思ハれ候。

種痘后の心得の事

問。種痘を致させたる折、及び、其後の心得方は、何如に候や、心得置たく候。

答。　凡そ、種痘いたしたる後、第五日目よりして、三四日の間だハ、多少發熱するものに候、それゆへ、口も同様に熱するより、好みて、乳房を口中に入れんと致し、夜は、甚だ寢つきがたく、又た、稍もすれば、ス子て怒る氣味も有之、其上へ、腹工合も少し惡るきようの様子に見へ申さん、斯て、九日

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

目、又は、十日目となれば、種へたる場所の近邊一二寸が程ハ、赤くなり、且つ膨れて、熱の氣あり、此の樣躰にて一二日間發熱いたさば、之れより追々と療へ申すべし、但し、之は、凡そ種痘したるものにて、其種の附きたらんときは、誰れにも皆な起るべき樣躰なれば、別段心配するには及バぞ、寧ろ種の附きたることを賀すべきものにや候ハん、夫れゆへ、之を心配して、何か解熱の藥を用ひたしなど云ふものあれども、之は、切角効能のあらはれんとするを、打消すと同樣の事にて、甚だ愚らしきものに候、但し、餘まりにハレすぎて、痛くあらば、其の場所に、牛乳の上は乳を懸け、鳥の羽、又は、羊筆の毛の如き者にて其上を擦るべし、之のみに

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

子供の齒の事

て甚だ心地よろしかるべく候。

問。種痘の事も、畧ぼ承はり候、よつて、之より、子供の齒の事を伺ひたく候が、全躰、齒は、何時比より生ゆるものに候や。

答。之は、一定せざるとゆへ確とは申しがたけれども、大抵は、先づ、七月目の程より生へ初むるものに候、然し、中には、三月目より生へ初むるものもあり、甚だしきは、生れながらにして齒のそろひたるもあり、或ハ、亦た、一年半乃至二年にして、やうやく少しづゝ生ゆるもあり、眞に色々の變化あるものに候。

齒の生へ方の事

問。然らば、先づ、七月目より生ゆるとと相定め置き、扨て、

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

歯の生ゆる時の痛みの事

その生へ方等は、何如に候か、次に伺ひたく候。

答。左様、歯には、御承知の如く、假歯と本歯との二つあり、假歯は、後ち、悉とく脱け去り、其上にて、本歯が生ゆるものに候が、先づ、順序に随ひ、假歯の事を申さんに、之は、惣躰にて、凡そ、二十の歯之れあり、何れも、概ね一對の様にて生ゆるものに候。

問。此の歯の生ゆるとき、齶脹れ熱して痛むとあり、爲めに、子供は甚だ心持を悪くして、太たく泣くことも御座候、其節は、何如いたして宜しかるべく候や。

答。此時は、無論、之を刺して、血を取去るが最良の事に候、此の療治の心得方も、之れあり候へど、未熟の人には、兎て

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

歯の生ゆる時何をかますべきかの事

も出來がたし、矢張り、歯醫者に頼みて、速かにハレを療やすべきなり。

問。子供は、歯の生ゆる時、何かを嚙みたがるものに候、之は、何如にせバ宜しかるべく候や。

答。矢張り、何か、嚙むものを與へて、差支へなく候へども、餘まり硬たきものを渡すは、勿論害あることに候、思ふに、インヂアゴムが、最もよろしきかと存じ候、如此き者を嚙ますするときは、反つて、歯の生へ方を早くするの効能あるものにて候、此時、子供は、拇指をかむとあり、中には、之を心配するものもあれども、之は、決して憂ふるに及バず、拇指は、實に、是れ、此折に必要なる最上のインヂアゴムの如きも

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

のなれば、自から、之を嚙みて、齒の生ゆるを促がさすると、自然の一つの妙工と思はれ候。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

スウプの吸ひ方の事

食事を猶豫する事

隣席へ讓る事

○西洋女禮（第六回）

第十章　食卓上の心得の事（下）

スウプを飲むには、スプーンの側に口を附けて、靜かに吸ふべし、決して、音をさする勿れ、亦た、スウプのお替りを爲すまじきは、勿論の事なり。

自分が前に食物を持來られたらば、直ちに之を食するを可とす、其他の客人惣躰に行わたりたる迄で猶豫するは、昔日に於てこそ禮式とも見たれ、今日にては、反つて之を不可とするなり。

又た自身の前に持來られたるを遠慮して、隣席の客へ讓る如きは一躰不都合の儀なり、之を日本同樣に心得て、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

徒らに嫌退しては宜しかるまじきなり。

自分の皿に取る事

小使、大皿に食物を盛つて順番に廻り來るべし、之を自身の皿に取るには、餘り多く取るも、亦た少しく取るも、宜しからず、必ず適宜にすべし。

魚を食する法の事

魚を食するには、一躰銀にて作つたる魚刀(フヒッシ、ナイフ)と云へるものありて、之を用ゆるが正式なれども、之れなき際には、左の手に、パンの小き塊まりを以て、魚を壓さへ、右の手にホーク(肉叉)を以つて、肉を掻き取り乍ら食すべし。

食用の道具の事

凡て何如なる事情ありとも、ナイフ(庖刀)を口のあたりへ持ち行くべからず、卽ち、ナイフに食物を載せて食する

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

と、眞に嚴禁なり、豆類は、ホークにて食すべし、プッヂング、カーリー、ターツ等皆なスプーンを用ゆべし。

アスパラガスの食方の事

アスパラガス即はち、松葉獨活を食するには、上等の人にても指にて之を取つて食ふもあり、亦た其サキを切り去り、ホークを以て之を刺して食ふもあり、何れにしても宜しきとゆへ、人の爲すまゝに隨ふべし。

種を吐き出す事

桃、櫻の實の如き核のあるものを食したるとき、此の核を口より吐き出して、之をスプーンに載せ、之をバ、更らに皿の上に置くもあり、又た手を以て口を掩ひ、密かに核を吐き出して、其儘、之を皿の片すみに置くもあり、双方ともに宜しきとなれども思ふに、第二の方更らに優さ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

る所あらんか、何れにしても、口より直ちに皿の上に吐き出す如きは、決してなすまじきもの也。

サウスの取方の事

サウス(かけ汁)を取るときは、常に皿の側へ、之をそゝぎかくべし。

食物の名をきく事

食つて味を知らざるは、固より不可なり、亦た食つて其食物の名を知らざるも、亦た宜しからず、故に、ボーイが之を持ちまいるとき、一々之を聞くとも、差支へなし、但だ、其不案内なるを笑はれんのみなれども、さらバとて、肝腎の料理に頓着せず、主人の好意を謝すべき時に謝せざるなどに比ぶれば、遥かに優りたる所あらん歟。

酒を飲むときにつきての心得方、及び、酒を入れるべきコツ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

酒を用ゐる事

ボーイの退く時の事

コッヒーを出す時の事

主婦人の机を離るゝ事

プに付ての禮式等多けれども、吾人は、女の方が、一人にても、酒を飲まるゝを好まず、凡ての女方の宴會に、一滴の酒にても出んとを、大に惡むものなるが故に、固より此等の禮式をも說明せず。

食事も了り、テーブルの上に、菓子皿を置いたるとき、ボーイ等、其室を去るなり。

而して、菓子皿を出したるのち、凡て、十五分を過ぎて、コッフヒーの瓶を、順次に廻わし、ついで飲むなり。

此の後ち、婦人方は、先づ、室を出づべし、尤も、家の主婦人は、客が食し了りたるとき迄で、其皿を前へ出すべからず、凡べての客が去る迄で、其室を離るべからず。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

食事中の誤ちの事

食事中、何か破りこわしたるときは、別段言ひわけするを不可とす、但た、其面色に誤りをせしとの容姿を見せて、其節は無言なれ、了つて後ち、之を謝するとも宜しきことなり。

招待の心得の事

凡て、客を招待するものは、餘程用意を密にし、亦た、心限り馳走するとの覺悟なくては、成らず、客人は、玆に招かれて來る間だに、其の時間と金との損亡少からずとの一事を、常に紀念して、招待し參らすること大切なり。

御馳走の事

御馳走の上乘は、何も色々の珍味が、山川より大層に集まりたりと云ふにあらず、品は少なくとも、其品が恐く上手に出來て、料理鹽梅の尤も宜しきを得たるを專らと

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ボーイを叱る事

談話の席に子供を連るゝ事

するとなり、故に、冷やかなるべきものは、氷の如くなるべし、温かなるべきは、燒たるが如くなるべし、ボーイは、靜かにして、迅速に取扱ふべし、客人をよく喜ばすべし、室は明るかるべし、時間はチヤンとして、づろうなるべからず。

ボーイが、何か命じ置たる事を違へて、誤まりを爲すとも、客人の前にて、決して之を叱るとなどあるべからず。

食事了り、菓子皿の出でたるとき、主人主婦人は、決して其子供をして席に在らしむべからず、子供が在つて面白ひ話が出來ると云ふは、只だ儀式上の世辭なり、大抵は、眞にウルサキものなり、故に、主人等は、能く之を心得て、

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

食事了り談話の席へ行く迄の事

此の際、之を外へ出しをくべし。

前に申したると一風かわりたる禮式は、食事の凡そ畢りたるとき、主婦人立つて禮したるとき、當席の婦人方のみ、此の主婦人に從がつて室を出で、客間に行て休むべし、凡そ十五分を立ちたるとき、コッフヒーを出して、之を飲み、其後の頃に至つて、食室に殘りたる紳士方へ、コッフヒーを出さしむるの手順とするなり。

食机の事

食事の折の机、もし餘り長からば、主婦人の左の紳士、及び、主人の右の婦人、大層互ひに、離れて、談話しにくし、故に、机は、長きよりは、卵形になつたるを宜しとし、最上なるは、眞四角をよしとす。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

時々假眠する事

○女子生理　（第六回）

第二章　懐姙の事　（其四）

姙婦は、一日に一二度づゝ、暫時寢るを宜ろしとす、別段に寢床を敷くと、面倒のやうなれども、躰を傷めては相成らざるわけゆへ、必らず、布團を厚く布きて、其上に休むべし、尤も、西洋風の家にて長椅子などあらば、之に越したるものはあらじ、扨て、右の床にて、一度に、大抵三十分間程づゝ寢ねて、起き出づへし、姙婦には、餘程効能多かるべし、或大醫の説に、もし如此せば、墜胎のうれひもなく、又た、難產の氣遣ひもあらずとなり、心得置きて、成るべく其やうに致されたきものなり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

寢室の空氣を流通する事

姙婦の夜る休むべき寢室は、くれ〴〵も、空氣の通ひを善くすべし、前回にも、香を焼くことを述べて、略ぼ其理由を申し置たるが、凡そ、空氣の不潔なるほど、早速に自躰を害ふものハあらず、一躰空氣は、躰を養ふ所の一つの食物なれば、此の食物の成べく新らしく、成るべく養ひ多きを吸ひ入るべきは、勿論の義なるに、既に、人の吐き出したる如き、不潔不浄のものを、飲み乍ら、何にとも思はざるは、眞に愚かしきことなり、思ふに、純粋ならぬ空氣を吸ふは、恰かも腐れたる食物、又は、人の口より吐き出したるけがらハしきものを、其儘、飲食すると、同様の理なり、空氣の通よひを善くして、常に其の新鮮清潔なるを吸ふべしとの事は、衛生

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

寢られぬ時の心得の事

家の特に熱心に忠告するところなるが、就中、姙婦の身に取りては此の心得方尤も大切なり、故に、晝の間は、無論、窓を開らき置くべし、夜もよく〳〵惡氣を出す工夫を爲し置きて、床に入るべきなり。

然るに、姙婦は、毎々、夜中寢つきがたく、躰中何となく物苦しく覺ゆるとのあるものなり、斯て、もし夜間十分に寢ねもせざれば、翌日其の身躰の大に疲勞するとは、言ふ迄もなく、後々來産をするとき迄も、其害の遺り及ぶものなれば、成るべく工夫して、寢心を好するを大切なり、故に、斯ると にて困難する折は、即ち、左の條々を心得て、試み見るべし、其の次第にて、大方は、寢らるゝように爲るべきなり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第一。斯る時は、蓐を減じ、少し薄衣の心持にて、床を用意すべし。

第二。寢室可成りに廣ろくして、寢床を窓の近くに用意せずとも宜しきはどの次第ならば、斯る折りには、其の室の窓を開らくべし、即ハち、夏ならば、窓の下を六寸乃至八寸はども開け、冬ならば、同じく二三寸はども開きをくべし(共に西洋窓に就て云ふなり)。

第三。但し、寢室狹くして、寢床殊の外か窓に接近せば、則ハち、窓を開らき置くは宜しからず、之は閉ぢ置きて、室の入口の戸、又は、フスマを開らき置くべし、又た、西洋風の家屋ならば、則ハち、天窓(マハリ椽下の窓)を

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

開らき置くべし。

第四　此時、もしや通じのなき故にては無きか、掛念すべきとなり、實際然らんには、蓖麻子油を飲みて、之を通ずべし。

第五　或は、又た、何か眠氣を減ずべき強味の食物を食べたるゆへにては無きか、凡そ、斯る食物飲物は、必らず一切嚴禁すべし。

第六　可成りに運動すべし、運動を程好くすれば、大抵は寢らるゝものなり。

第七　朝起きたるとき、躰を拭ひふくべし、即ち、夏は冷水にて洗ひ、冬は、微温湯にて洗らひたるのち、能く拭

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

寝る時の用意の事

ふべきなり。

第八　もし夏の夜ならば、斯様なる眠氣のさめたるとき、能く冷やしたる果物を食用すべし、快氣よく眠らるべし。

又た、姙婦は、寝るときに、何か躰を壓されたる如く思ひ、息氣の塞がるようなる心地するともあるべし、之が爲め、自然、床に入るとを嫌らひ、隨ては、睡眠の足らぬようの事も起るべし、此樣の時は、西洋風の寝台を用意し、布團のアタりを心地よくし、枕を高く相應にして、成るべく躰の自由を得るように取計らひ、尚は床に入る前に、コップ一杯の水に、炭酸安漠尼亞匕一杯を混ぜて、飲むべし。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

早臥早起の事

姙婦は、夜早く寢ねて、朝早く起ると、亦た大切なり、故に夜は、必らず十時に床に入り、朝は、冷けき內に、庭內を散步し、早く朝食を了るようにすべし、然るに、姙婦なればとて、朝晩くまで寢ね、其代りとも見て、夜をそく迄で雜談して在らるゝと、以ての外の儀なり。

病氣の折の心得の事

扨て、之より、姙婦の疾病、及び、療治方などに付て申すべきが、元來、凡そ病あるときは、成るべく、早く、醫師の診察を乞ひ、其藥を貰ひ受けて、服用し、其の教ゆる通りに、身の養生を爲すと、第一の心得なれば、婦人方が、自から精しく病理治療の事を承知なきとも、差支へあらず、必竟は、僅かの事にも能く掛念して、早く醫師の許に參るべきとが、最上一

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

手療治し得べきものゝ事

の覺悟なれども、實際は、なか〳〵さように成さるゝ人あらず、隨ては、少々の不快ありとも、兎角之を懶うく思ひて、醫師の診察を請はるゝこともなし、彼此といたすうちに、最初は、實際些細の事なりしものが、今まは、大したる病症となり、最早手後れをしたりとて、國手の首をも傾けさする次第はなはだ歎かはしきことなり。

故に、之よりして、左に、極々手輕にして、安全なる治療法の多少を講述し置くべし、之は、姙婦の身に有りがちなる、色々の僅かなる病を、直ちに治療する方法にて、大抵は、自身にて手加減をすることを得るようのものゝみに限れり、故に、此外のものは、兎ても自分療治の出來ぬものと承知し、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

姙婦泌結の事

早速醫師の診察を受けて、其藥を服し、決して手後れのなきやうに致されたきものなり。

姙婦は、泌結し易きものにて、通じの少きと、間々あるとなり、然るに、此際は、尋常の通じ藥を用ひては、宜しからず、成るべく、温和なる、下劑を用ひねば成らぬとなり、故に、カロメル、及び、水銀を混じたるいろ〳〵の下劑の類は、決して服すべからず、必らず、其害あるべし、彼のヒマシ油、サラッド油（サラッド油とは茄物などにかくるヲリーブ油のとなり）、大黄丸、蜂蜜、蒸したる梅、無花果、葡萄、燒きたる林檎、燒きたる梨子、コッフヒー、麥麭包と糖蜜の如き、凡そ下劑の効能ありて、而も、其力のはなはだ軟らかなる類を、服用す

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

べし。

此中にも、ヒマシ油は、特に姙婦の祕結したるに用ひて、宜ろし、但し、之を服するに、一時に多く用ひんよりは、度々少しづゝ用ゆるを善しとす、其量は、即ち、一度に、匕一杯ほどに限り、朝はやく之を服すべきなり。

但し、ヒマシ油は、餘程飲み惡くきものなれば、之を嫌ふ人多けれども、之は、全く其の服し方を承知なきゆへなり、蓋し、之を服するには、コップを清水の中に全く浸たして、其の內側のグルりを、悉く能く潤はし置き、扨て、此の內に、能き加減に清水を容れ、而して、服すべき丈のヒマシ油を此の水の眞中に滴らし、決してグルりに附か

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

サラッド油の事

ざるように爲して之を飲むにあり、左らば、油の氣決して口中につかず、快ちよく飲まるべし、次の法は、温めたる牛乳の上に、油を落して、飲むにあり、其次の法は、コッフヒーの上に落すにあり、尤も、コッフヒーの上に落すときは、預かじめ之を能く加減して、砂糖牛乳等を混ぜ置くべきなり、又其次の法は、之をミカン類の汁の上に落すことなり、中には、之を酒ブランデーなどに混ずる向もあれども、之は宜しからず、后に至り、酒の氣にて酒を多少溶解し、其氣味の嫌やなる臭はひを、胸のあたりに出さするとあるべし。

次に、サラッドヲイルを用ゆるには、其分量等も、ヒマシ油

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

と同様にてよろし、但し、之を飲みたるのちに、何か水菓子を食するをよしとす、尚は、また之を茄物にかけて用ゆるときは、尋常の野菜として食しながら薬を服するの兩得あるものなり、元來、此の油は、下劑として効ある上に、人の躰を肥やすべき力あるものゆへ、介弱き女方にとつては、至極適當のもののなるべし。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

溫熱の移り行きの事

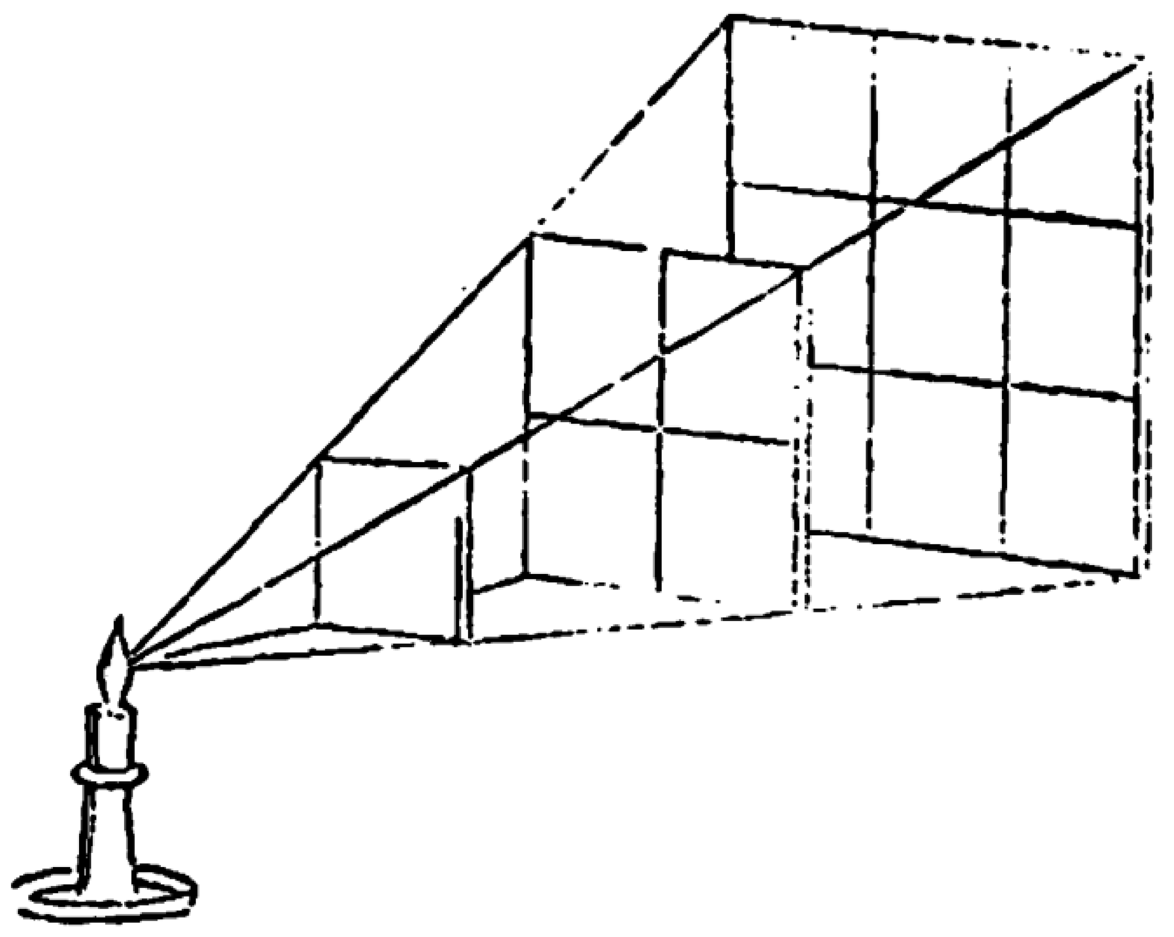
○家內理學　（第四回）

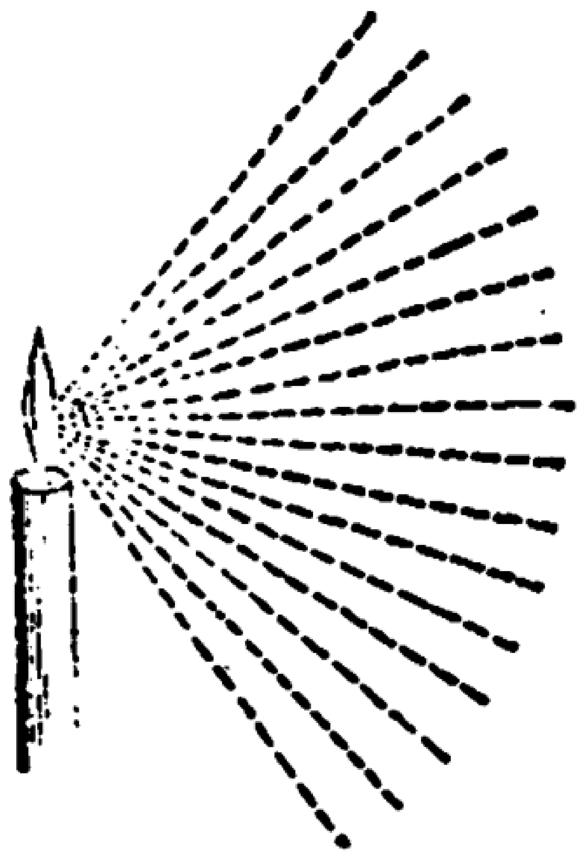
第四章　溫熱反射の事

凡そ、溫熱は、一つの物よりして、他の物へと常に移り行くものなるが、其の移り行く模樣は、物によりて、各相違あり、されば、溫熱を受取る有樣、之を保存する有樣、及び、之を更らに他へ送りやるの有樣等は、萬のもの、皆それ〴〵に相ひ異るものなり、然るに、太陽の光線、又は、火焰などより發する光線に伴なへる、かの溫熱は、何れも一直線に他へ移り行いて、餘程迅速に傳はるものなり、故に、斯の如くにして移つり傳はる溫熱を名づけて發熱 (Radient Heat) と云へり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

發熱の模樣の事





扨て、此の發熱と云へるとは、實際何如なる風にて出來るものかと問ふに、圖に示す如く、光の一點より出る温熱が、先へ參るに隨ひていよ〱分散し、分散すると共に、いよ〱其の熱氣を減じ行くなり、(但し、之はたゞ光の一點より出る有樣を申したるにて、圖に示したるも、亦た其意味なり、然し、實際には、蠟燭の火の全躰は、悉く温熱を發する所と相成るとゆへ、斯くして全躰より出る温熱の線は、互に入亂れて、眞に

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

発熱の氣隔りと共に減ずる事

無數莫大なりと知るべし　而して、其熱氣の先へ行くほどに減ずるとは、明白の事にて、火の傍へ在ると、遠く隔りてあると、温かさの大層に相違するによりて、之を承知し得べきなり、然るに此の熱氣は、何如ほどの割合にて減じ行くべきやと云ふに、其發熱物を離るゝ隔たりの平方數丈けづゝ、薄らぎゆくと申すとなり、例すれば、火より二尺はなれたるとき、百だけの温熱を感ずるとせんに、更らに二尺を離れて、四尺の所に至れば、温熱は、前の四分一となりて、たゞ二十五だけの温かさを感ずるに至り、更らに二尺を離れて、六尺の所に至れば、温熱は、最初の時の九分一となりてたゞ、十一、一餘だけの温かさを感ずるに至り、更

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

温熱は物によつて移り行くと移らざるとある事

らに二尺を離れて、八尺の所に至れば温熱は又更らに減して、最初の時の十六分一となり、たゞ六、二五だけの温かさを感ずるに至るべし、即ち、隔りが二倍すれば、温熱は四分一となり、隔りが三倍すれば、温熱は九分一、更らに隔りが四倍となれば、温熱はまた十六分の一と相成るものにて、即ち距離の平方數丈け減ずるとなり。

温熱は、一つの躰より他の躰へ移り行くものと申し置たるが、此の移り行くの多少は、其物によりて、大なる相違あり、中には、殆んど其の移り去るを止むるものすらあるなり、例へば、空氣ハ温熱を自由に傳ハり行かしむれども、水は、殆んど全く其の移り行を止むるが如し、然るに、亦た、不

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

思儀なるは同じく温熱と云ふとも、此の温熱を發するものゝ相違によりて、同一の物躰が、或ハ其の移り行きを許すとあり、又或は其移り行くを止むるとあり、即ハち、かのガラスの如きは、太陽より出づる温熱は、之をして自由に其躰内を移り行かしむれども、ストーブ暖爐の如き所より發したる温熱ハ、大抵は之を拒み止めて、其の躰内を移り行かしめざるなり。

但し、ストーブ暖爐より發したる温熱は、一切ガラスの内を通り行かずと云ふにはあらず、固より、多少は之を通つて移り行くとなり、而して其多少の量は、ガラスの品位何如によりて、異るものなり。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

温熱の移り行を許さゞるものは其躰温かき事

扨て、温熱は、斯く物によつて、或は移り行き、或は移り行かずと云ふ、但し、此の移り行かざるとは、例へば、暖爐ストーブの熱が、水もしくはガラスの方へ傳はらざると云ふにあらず、水、ガラス等に全く傳はり移りて、扨て、之より先へと移り行かざるとを云ふなり、故に、彼の温熱は、水及びガラスの内に、全く吸ひ取られて、此の水を熱くもし、又ガラスは熱しもするとなり、然るに、彼の空氣の如く、温熱の移り行きは自由に許すものは、自分の躰内に温熱を引止るとなきが故に、其身は左程に熱するともなく、常も、大抵あたゝかき事はなきものなり。

次に、或る物躰が、温熱を發するに、早きと遲きとあり、即ハ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

温熱を發散するに遲速ある所以の事

ち、直ちに冷へ去る程に早く自分の温熱を發するものもあれば、また、温石の如く、何時迄も温熱を自身に保有して、他へ發するとの甚だ遲きものもあるなり、左れば、此の早きと遲きとは、如何なる事情にしたがひて、左樣の區別を生ずるものなりやと云ふに、之には色々の原因あるが如く思はるゝなり、先づ第一には、其物が温熱を含むの多少に由つて、遲速あるが如し、即はち、温熱を含むは彌よ多ければ、多きほど、之を發するとも亦速かなれども、其温熱を存する量漸やく減ずると共に、之を發するとも亦た段々に緩やかとなるなり、第二には、其物の表面の滑らかなると、否らざるとに由つて、遲速あるが如し、即はち、表面あら

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

く平らかならざるときは、温熱を發するも甚ハだ速やかなれども、之に反し、表面平らかにして、甚だ滑らかなるときは、温熱を發すると、非常に遅きものなり、温石の冷むるとの遅きも、亦た、一つは此の道理に由るとなるが、彼の金屬かな物の類は、之を磨くとき、表面はなはだ滑らかとなるが故に、温熱を發散するとも、亦た大層に遅きものなり、然し若し、其表面に油煙墨の如きもの附てあらば、温熱を發散すると極めて速かに相成るべく、また此の金物の表てに、ザビなど出來たらんときも、發散の度甚だ早かるべし、故に、レスリーと云ふ學者の説に據れば、煙墨の附たる表面より百丈けの温熱を發するとならば、磨いたる表面

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

實際溫熱を保存する工夫の事

よりは僅かに十九丈けしか發散すまじとなり、其相違甚はだしきものと知るべし。

博士ラードチル氏の說に云く、磨いたる表面あれば、溫熱の發散遲しと云ふと、之は、何も、磨いて光つたと云へるとにて、然るにはあらず、之を磨くとき、幾分か其表面の金を固くするが故なり、左れば、サビたる表面より溫熱の發散早しと云ふも、之と反對の道理にて、必竟表面の金が固からざるゆへなりと申したり。

右に述べたる、色々の道理を、實際に利用し、扨て、溫かさを徒らに失はせまじ、溫かきものを成べく久しく冷まさじと云へるやうの折は、何如にすべきと云ふに、彼のガラス

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

陶器、石の如きものは、即ち、温熱を尤も早く發散するものゆへ、此等の器に温かきものを入るゝは、大なる損なり、是非とも、能く磨いたる金物の器を用ゆるか、又は、前に申したる如き器の表面を、かゝる金屬にて包むべし、又た、コツフヒイつぎ、及び、茶瓶の如き者にても、其表面を能く磨いて滑らかに爲し置けバ、温熱の發すると遲きが故に、左ては、其の冷むるとも亦た甚だ遲かるべし、其外、ストーブの筒の如く、温熱を發散するとを目的とするときは、成べく、其表面をあらくさびて在らすべし、然し、若し、一方より一方へ温氣を持ち參ると云へる折りの管は、成べく滑らかにして、能く磨いたるものにてあるべし。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

●女學雜誌社新書發兌

つれ〲草講義第一　定價十二錢 郵税四錢

右は鈴木弘恭君が下田歌子の和文教科書を諸の女學校に於て講釋ありたる解明しを社員が筆記したる者なり元と教科書第一卷の講釋なれば斯く題しぬ

右第一卷出版の後ち諸大家より左の評を寄せられぬ

○小中村清矩君云く(上略)昔より注さくの書どもこれかれあれど或は事足らす又はくはしきに過たればいかで大かたをつゞまやかに解き得たる事もあれぱやと常に思ひたりしに此講義を見れば一段ことに先づ文詞をときあかし扨て大むねを取りすへて常のたゞ言もてたれも〲心得やすきさまにさとされ又折にハ文つくるらん法則ともなりぬべき言をさへ交じへられたれば雨り其とき言を聞くこゝちして學びの山口わけうめん女わらべには栞ともいふべくこよなきたま物ならんかし(下略)

○内藤耻叟君云く徒然草の抄拜見仕候每度御手練の義感歎仕候此頃女子もいかめしき文躰を書き候へ共女子の文章ハ大抵徒然草などの躰裁に致度事と存候漢文めきたるは不相應の樣にも相覺候只管に男勝りなるが女子の本意とも不被存候依ては此御抄など尤も作文の軌範と相成可申候(下略)

○黑川眞賴君云く(上略)うのはじめのほど十八段ばかりすり卷になれるをすこしいとまありければ取いでて見る〲「我やとのむつましき人となるものはつれ〲といふふみにうありける」手はなちかたくて日のくるゝまでに見をへつ

○久米幹文君云く徒然草は(中略)諸の學校の教科書に用るなれど先は大ようにのみ見すぐしてまめやかに心得たる人はまれなるべしさるを鈴木大人のこの講義よいとつゞまやかに文段句法のきだ〲ことばの心はへをもとき明されたるは世にある註釋どもにまさりてめでたし初學の人この書をよくよみたらんには古今の文法をさとり得て其かきいでん文も又めでたからんかし

婚姻論　全一册(横山雅男君著)　定價三十五錢 郵税十四錢

○朝野新聞評(略)之を古今萬國の記錄に徵し既往現在の實例を拔き論說餘す所なし近來女權論の盛んなるに連れ婚姻の一事も人心に浮み出る所となり新聞雜誌等も之を論ずる事少からざれど未だ本書の明晰詳確なるに及ぶものなしとの世評あるハ過ぎたりと云ふべからず云々

○每日新聞評(略)書中述る所徒に空理に依らずして統計の事實に依り學理に徵して婚姻の標準を示す等は著者の最も苦心したる所ならん云々

○やまと新聞評(略)苟も文明社會に周旋する者の一讀を要すべきは敢て喋々する迄もなし予輩が此書を稱賛する點は議論の歐米直輸入に非ずして亦能和漢古今來の慣例をも取調へ亦統計法に依て今日の實況をも究めたるにあり云々

○教育時論評(略)每篇の論理は精密なる各國の統計と禮法とに基きたるもの、如き有益の論著なり

○めざまし新聞評(略)何々等を論じたるものにて發行所ハ例の停止後評判の好き女學雜誌社なり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

○日本の女學評（略）今ま此論の本邦に產したるは必竟文明の媒妁に出る者として吾人は慶賀すべき也

木村鐙子小傳 一册（巖本善治編）

右は編者が明治女學校生徒の爲に編著し且つ友人知己の間に配布したる者なれども尙は殘部有之に付一册十錢郵稅六錢を送らるゝ者には呈送すべし

文法口授 一名和文獨り案內（鈴木弘恭君著） 價十八錢 郵稅四錢

右は學校敎科用の書籍に適當なりとて既に成立學舍女子部頌榮女學校長榮女塾明治女學校等の敎科書と爲る

束髮獨案內 渡邊鼎君著（細圖入） 定價十五錢 郵稅四錢

東京々橋區日吉町八番地

女學雜誌社

女學雜誌第七十九號目錄

●社說　女子と文筆の業第一（文筆の業女子に好都合の事）○女學校の論に附す●論說　一日間の衞生（荻野ぎん）○婦女權利の沿革第三（穗積陳重）●叢話　秋夜の怪談第二（櫻田ゆかり）○鹽原入浴の記（鈴木弘恭）○家內の飾り付●批評　浮雲の褒貶第三（石橋忍月）●佳傳　女丈夫傳（第三）●小說　薔薇の香第十二回（月の舍しのぶ）●新報　八件●廣告

女學雜誌第八十號目錄

●社說　女子と文筆の業第二（新聞雜誌の女記者●論說　良人に告ぐ（編者）○婦女權利の沿革第四（穗積陳重）●叢話　秋夜の怪談第三（櫻田ゆかり）○鹽原入浴の記（鈴木弘恭）○一休和尙の母の敎○小供を育つるの心得●批評　浮雲の褒貶第四（石橋忍月）●佳傳　女丈夫の傳第四●小說　薔薇の香第十三回（月の舍しのぶ）●新報　十二件●廣告

女學雜誌第八十一號目錄

●社說　女生徒への苦情●論說　日本古代夫婦のありさま（佐藤定助）○人種を改良せんとには婦人の躰育を必要とす（實吉安純）●叢話　夫婦間の禮儀○鹽原入浴の記（鈴木弘恭）○產婦の泌結●佳傳　紫式部●小說　薔薇の香第十四回（月の舍しのぶ）●寄書　慈善の婦人（司馬とう）文苑（鈴木弘恭撰）●新報　十二件●廣告

發行所　東京京橋區日吉町八番地　女學雜誌社

持主兼編輯　巖本善治

印刷　森田豐

東京秀英舍印行